ば、せんそくれうにこそはならめといふを、これは御まへに、かしこうおほせらるゝにはあらず、のぶつねがあしがたの事を申さゞらましかば、えのたまはざらましとて、返々いひしこそおかしかりしか、あまりなる御身ほめかなと、かたはらいたく、

〔枕草子五〕かたはらいたきもの

ざえある人のまへにて、ざえなき人の、物おぼえがほに人の名などいひたる、ことによしともおぼえぬ我うたを、人にかたりきかせて、人のほめし事などいふもかたはらいたし、

〔自讃歌序〕このみみち、中比よりもなをいにしへざまにおよぶことに侍りけり、しかあるに人のこゝろのせきしなければにや、をの〳〵みづからの歌とのみ思ひて、そのさましらぬもおほかりけるを、かしこきをろかなるをしらしめ、後のよにもうらみあらじとて、身づからよめる歌のなかに、よろしきを十首たてまつらしめ給ひて、心々をみたまひけるに、まことに山人の薪をおへるを、のがれたれども、繪にかけるすがたのまめならず、露をあざむく心のみおほかりけるに、御みづから○後鳥羽の御うたをも、此御つゐでに見せしらせめ給ひけるぞ、御惠のふかさも、すゑのよのまもりとまで見えける、○中略

後鳥羽院

櫻さく遠山鳥のしだり尾のなが〳〵し日もあかぬ色かな○下略

〔明月記〕建保元年正月十七日、以書狀訪前中納言、資辨超越事也有述懷返事、清範朝臣奉行、生涯詠歌廿首可撰進云々、此事更不思得、難撰之上、定背叡慮歟、午時許先内々書送清範許了、

〔神田本太平記三十二〕京軍事

三月○正平八年十二日ハ仁木、細河、土岐、佐竹、武田、小笠原あひ集ツて七千よき、七條西洞院へおしよせ、一手ハ、但馬たんごノ敵と戰ヒ一手ハ尾張修理大夫高經と戰フ、此陣のよせて千よき、高經ノ五

名譽品